六花

りっか

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

cover designed by masami

12月号

貫

山田六甲

せきれいの濡れたる芝を走りけり

かげろふを見つけし冬の日向かな

くちばしを時をり湿し遊び鴨

暇あらば羽根繕(つくろ)ふよ朝の鴨

柊(ひいらぎ)の花の匂へる水辺かな

冬の蠅石の端から水覗く

とがりある石に腰掛け冬紅葉

水底の紅葉に貝の埋もれをり

吹き寄せといふは菓子の名小六月

遊びゐる一羽を鴨の呼びもどす

桟橋(さんばし)の影に及べる鴨の澪(みお)

鴨一羽千鳥の群の中にをり

鴨の餌濡れし手摺(てすり)に置きにけり

日を浴ぶる冬たんぽぽの絮(わた)つぼむ

蝶々の透(す)けてをりたる氷かな

雪華抄（せっかしょう）

ことり

曇日を仰ぐ水仙剪（き）りながら

枕髪（まくらがみ）拾ふ曇れる冬の朝

残菊やひきしまりたる庭の隅

てのひらの折鶴焚火（たきび）にくべにけり

断崖（だんがい）をたばしりにけり葛（くず）紅葉

冬めくや瞼（まぶた）おもたく文を読む

床（とこ）の間の寒菊硬（かた）く開きけり

寒菊の輪郭（りんかく）ただし咲きゐたり

寒菊の風に乱れて散らざりき

曇りたる冬の遠嶺香（えんれいこう）を焚く

PDF= 俳誌の salon

寝そべりて転がしてゐる毛糸玉

床にゐて冷たき髪を編み直す

木枯はちどりあしこそ相応(ふさわ)しき

佗助(わびすけ)を手にとりほめてやりにけり

卓の上温(あたた)め酒の冷えゆける

いつも指叱られてゐる寒稽古(かんげいこ)

去り方を教へるやうに冬夕焼(ゆやけ)

擦(す)り傷を北風削りゆきにけり

立ち込むる匂ひ水仙枯れながら

蔦(つた)枯るる喧嘩(けんか)ごしなる音(おと)風に

夢風撰巻頭

琴をひくごとく堰（せき）落つ秋の水

三井　孝子

残暑かな満願の日の長石段

杭打てる手の笑ひけり瓜畑

極暑なり体の内の内を病み

葉脈に水行き渡る大豆畑

秋になって水量の減った透明な水が堰を落ちるときの様子を独自の比喩で琴を弾くようだと捉えた。

堰を超えた水は風向きによっては一方から順に横滑りするように流れて落ちるときがある。掲句も秋風に吹かれてそのように流れがスライドしていったのである。またその様子と澄明な水音は琴を弾くときのようであると例え、堰そのものが琴でもあるかのように思わせる力がある。

PDF= 俳誌の salon

村祭

梶浦玲良子

コンパスの開き過ぎたる白露(はくろ)かな
電線の旅の行方や緋連雀
漫才へ鴉(からす)あつまる村祭
流れ星おかめひよつとこ手をつなぐ
黍(きび)あらし鶏冠(けいかん)たたら踏みにけり

芋の露

木内美保子

熟(う)れ初めし稲穂に夕日輝ける
芋の露小さき夕日の転がれる
ゆらゆらと風にゆらめき秋の蝶
ふと頬に秋を感ずる歩道橋
釣り人の浮標に寄りて川蜻蛉(とんぼ)

十三夜

笹村　政子

みくじ結ふ枝を残して松手入
松手入松葉の嵩を測る足
紙垂の縄に貼り付く秋時雨
熱帯ぶる掌に受く椿の実
水ぐすり瓶に泡立つ十三夜

手秤

水谷ひさ江

小春日の足袋裏返し干しにけり
鳥兜紫つつましく思ふ
手秤で競ひ合ひ諸掘りゐたる
庭師来て刈り込まれけり帰り花
里芋の土こぼしつつ帰りゆく

PDF= 俳誌の salon

洗い髪

貝森　光洋

笠の顔時々起こし風の盆
長き夜のはてなマークの自在鉤
爽(さわ)やかや空に描きし鳶の声
口開けし通草(あけび)は高所恐怖症
作るほど淋しき俳句秋の暮

牡丹焚供養

小田　元

横顔の暮れてゆきけり牡丹焚　六甲
牡丹焚く煙にむせてをりにけり
ときをりに火をゆする風牡丹焚

雪樹集

琴（夢風撰）　三井　孝子

残暑かな満願の日の長石段
杭打てば手が笑ひけり瓜畑
琴をひくごとく堰（せき）落つ秋の水
極暑なり体の内の内を病み
葉脈に水行き渡る大豆畑

虫の音　池崎るり子

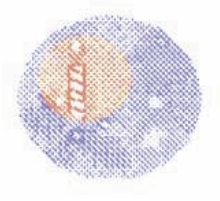
門灯の消えて虫の音残りをり
暗闇の足許（あしもと）ちちろ跳び立てり
蜘蛛（くも）の囲の大きく破れゐたりけり
蟷螂（とうろう）やためらはず斧振り込みぬ
蛉虫の面倒見よき喫茶室

PDF= 俳誌の salon

六花集

六選

久永　つう



久永　つう

雲流る男の子の吹ける草笛に
一礼をしてより滝を離れけり
ふいに時止まれと思ふ秋の旅
我がたつきこれで幸せ秋刀魚焼く
彼岸花故郷そこに見えて来し

筒井八重子

心地良く聴いてをりけり鉦叩
蟋蟀の声に聴きゐる夕べかな
初秋の風の流れてきたりけり
今日のこと全て忘れむ虫の声
露踏みて足跡残しをりにけり